まえがき 10

第一章　子どもをもつことに躊躇する、それぞれの理由 21

子どもはＡＩでいい
生まれてくる子どもにはメリットがあるのか
きっといいことだけじゃない

第二章　反出生主義と現代 31

反出生主義とは何か
ベネターによる「生殖否定」
反出生主義が投げたボール
子どもは他者
生の根源的受動性
善百合子の呪縛

親は神様をやっている
宗教なき時代に
「生きろ。」が成立するか

第三章　もやもやと何となく産みたいと思えない——57

気候変動は待ったなし
人間活動の根本を変える問い
「何だかんだ可愛い」
母が幸せそうに見えなかった
二一〇〇年の未来

第四章　いまバーストライカーと呼ばれる女性たちがいる——73

「子どもをもたない」という宣言
国家に利用されてきた「母性」

バーススストライカーになった理由
炭鉱のカナリアとして
子を産んで後悔することのほうが怖い
「子をもつ意味」の変化

第五章　希望を失わないための努力を絶対にやめない

自分の平熱が三十八度になってしまったら……
「ホットハウス・アース・シナリオ」
自分の人生に責任を持つこと
生命自体に価値がある
何よりも大きな冒険
社会を変えたいと思っている性分
「私はただ黙って見ていたくない」

第六章　分断を超えるには　107
世代論として
フリーターは自由の象徴だった
若いころの恋愛経験
最初から子どもをもつ可能性はなかった
七転八倒しているのであれば無計画ではない
勝手な像による悪魔化

第七章　「選択的子なし」の背景　127
日本では生殖を「安全」に語れない
日本における生殖医療の現状
子をもたない選択肢のなかに……
世界の出生率
「接触」への恐れ

どんな世界だったら子どもをもつのか？

第八章　同じ社会のなかで生まれてきたみんなだから——147
ヤングケアラーだと思う
祖父の死と母の発病
普通の家族をもちたい
「置いていかれる」という感覚
誰にも孤独を感じてほしくない
同じ社会に生きる者として

第九章　子どもをもつ／もたないの先にあるもの——169
家族三人中二人がケアされるべき存在
もらったお小遣いを母のお財布に入れた
「子をもちたい」はランキング三百位！

Ｗｉｎ-Ｗｉｎになるためのシステム
分断したままでは誰も幸せになれない

第十章　あえて「母」と呼ぶ——193

托卵
「穴の開いた家」
子をもつことも／もたぬことも安心して語れない
「社会的母」に

あとがき——205

まえがき

この本を書こうと思った理由はいくつかある。

まず一つは、私自身の変化だ。私はいま離婚し、一人で二人の子を育てている。理由についてはここでは書けないが、とにかく頑張っている。そんな生活をしていると、どんどんと独身時代の自分が迫り上がってくるように感じることがあった。一人だったときの自分、結婚もせず、子もおらず、ただ自分の人生はどうなるのか、と未来を不安に思っていたころの自分、「若い女性」だったときの自分のアイデンティティが戻ってくるような錯覚に陥った。

感じ方や感情も、かなり独身時代の自分の感覚が戻ってきていて、ふと、「あれ、なぜ私に子どもがいるんだろう」とふしぎな気持ちになることがあり、むしろ独身の自分に、二人の尊い生命が降臨し、なんの天啓かわからないが育てさせてもらっている、そんな感覚になることがあった。

一人親は、アメリカではソロペアレントと呼ぶらしく、意志的にそれを選ぶ人もいるということをアメリカ在住のアーティストの荒川ナッシュ医さんに教えてもらった。わからなくもない。自分で新しい家族の形というものを作っていると、そんなふうに感じることもあった。子どもたち二人がのびのび、生き生きと私の周りを駆け回っていて、自分の感覚や考え方をだんだんと作り上げていく様子をそばでずっと見ていられるのは、本当にこのうえないことで、独身の私に子どもがいるという感覚は、血縁による〝所有〟の感覚を解き、この世界で二人の大いなる仲間たちと生きているという気持ちにさせられる。

大人が私一人しかいないことによる心細さや不安を経験させているだろうという心配はもちろんある。ことさら子らが、母一人を支えなければ、強くならなければ、とひそかに気を張っているところもあるかもしれない。けれど私自身、仕方がなかった。二人が笑顔でいられる環境が、まずは第一優先だったし、父母がそろった近代家族という形態は普遍的なものではないとも思う。むしろ〝ソロペアレント〟になることによって、核家族として閉じることを逃れ他者のたくさんの助けに開かれていく解放があった。

結果、毎日ゲラゲラと笑い合う家庭になっているが、それでも私が小さな彼女／彼らの気持ちを完全に推測することはできないし、してはいけないとも思う。将来子らがどう思

うかもわからない。だからこれは私の一方的な愛の告白であることを、ここで断っておきたい。

私は耳に入ってくる雑音にまどわされずにいなければと思う。というのも、一人で二人を育てている喜びとともに、一方で「シングルマザー」という、また新たな類型のなかにすっぽりと自分が入れられてしまう違和感も覚えたのだ。

たとえばある人から、子を通わせている学童保育が良いと聞いたので「どこの学童ですか?」と聞いたら、「あそこは高額なので……」とそのままお答えが止まった。私がシングルだから払えないと思ったのか。察知した私は、その人からそっと離れた。人は無意識にさまざまなレッテルを人に貼る。シングルのなかには、少し値の張る私立の学童に資金投入するために一生懸命収入を増やそうとする人もいるだろうに。

またある日は、うちの子はよく食べると保育士さんに伝えたら「丸呑(まるの)みしているかもしれないですね」と言われた。私は料理が一番のストレス解消で、趣味に近く、その成果物を子どもたちに味わってもらうのが何より楽しいので、実にさまざまなものを食べさせている。固いものも多く、たぶんうちの子どもたちの咀嚼(そしゃくりょく)力は同じ年ごろの子どもよりあると思う。しかし、その保育士さんはよく食べる＝丸呑みと決めつけ、シングルだから食

事に手を回せずおろそかにしていると考えたのだろう、と思わずにいられなかった。

くだんの保育士さんが担任になると知った私は、すぐに転園手続きに入ったが、最終的にこの保育士さんは私の息子の食べ方に問題がない様子を見て、「○○ちゃんは何でもよく食べて本当に偉い」と言った。だが、私にぐっさり刺さったナイフはもはや抜けなかった。

人は意識、無意識レベルでさまざまな偏見と差別に彩られている。

私はそうしたレッテルを貼ることで見えなくされることに嫌悪感を抱いてきた。最初の拙著『マザリング　現代の母なる場所』（集英社、二〇二〇年。集英社文庫、二〇二四年）では「母」というレッテルによって、次作『わたしが誰かわからない　ヤングケアラーを探す旅』（医学書院、二〇二三年）では「ヤングケアラー」という言葉によってその内部に展開する多様なグラデーションが見えなくされることを暴き、手垢（てあか）にまみれた意味を解体し、ゼロに戻したい――ゼロから考え始めて、同じような状況に陥っている人の多様な声を拾いたい――と思い、ずっと仕事をしてきた。

一人親で子どもを育てるというだけで、その状況に突入した途端、こんなにも風当たりが強くなるのか。この衝撃は大きかった。しかし私自身が感じていることは、世間がどん

なに偏見の目で見ようとも、まったく異なっていた。私という個人と、子どもたちそれぞれの個人が、一つの家のなかにいる感じがする。私は親としてではなく、この世界に少し先に生まれた先輩として、大人になるまではものの良し悪し、やってはいけないことはきちんと教えるけれど、それにも増して、子どもはまったく別の感覚と思考を持った仲間、同志として自分の家族のイメージが作られ始めていた。

家族を新たに作るということはむしろ、自分が生まれ育った家庭とは違う居場所を作ることができるものであると学んだ。子どもたちにもまた、私が作ったこの家族を乗り越えたり反省したりして、新しい家族を作っていってほしいとも思った。父母がそろった、いわゆる普通の家庭ではないからこそ、さまざまな形の家族のリアリティが体のなかに入ってきたのだと思う。お父さんだけの家族、お父さんが二人の家族、お母さんが二人の家族、祖父母が育てている家族……。そのなかで子をもたなかった家族の形もまた、以前よりくっきりと肌でわかるような感覚が生まれたのだった。

近代家族は、生物学的な父と母がそろっていなければいけない、その父母が子どもを作り養育せねばならない、という呪縛にがんじがらめになっている。それは国家につながる父権性を基礎とした〝イエ〟制度に家庭が接続されてしまうという呪縛でもある。父母の

そろった家族が核家族化して孤立し、共働きで子育てと長時間労働とのあいだで疲弊している姿も当たり前のこととなった。父母がそろった家族でなければいけないというのも、ある社会や歴史が作った規範に過ぎない。私自身は、多くのシッターさん、ファミリーサポートさん、友人、両親などの力を借りて、新しい家族像を作っている。そう思ったとき、さまざまな家族の形態が、私の体のなかにリアルに入ってくるようになったのだ。

第二の理由は、『マザリング』を書いたとき、各方面から勘違いされたことだ。あの本は、「母」にまつわるイメージや抑圧を解体する本であったし、そこでの「マザリング（mothering）」は「母性」とは別の概念で、性別に関係なく自分より弱い存在にケアの手をさしのべる行為そのもの、あるいは生物学的な母を超えて、さまざまな他者の手を介して社会が子どもを生かそうとする行為として描いていた。つまり、誰しもが「母すること」ができるのだと、戦略的に「母」という言葉を使っていた。

にもかかわらず、女性側からは、フェミニズムは「母性」を必死で取り去ってきた歴史があるのに、また「母」を称揚する話かと勘違いをされたし、男性側からは、「クソフェミ」と言われていると、ひそかに教えてもらったこともあった。私はそう呼ばれてもまったく構わないし、むしろ本に書いてあるのは、男性自身のなかにもある「母」を見つめる

という内容なのだが、とにかくそれらの反応は、総じて世の中には「母」を避けたいと思う人が多くいる、という気づきになった。「母」はいつだって取り扱い危険案件である。

決定的だったのは、「マザリング」の話をしてほしいと、とあるレクチャーを依頼されて話したときのこと。会場には子どもをもたなかった女性がたまたま集まっていた。最後のコメントで十五人ほどのみなさんが、「自分は子どもをもたなくて、どれほど良かったか」ということを語っていた。子どもをもたないことを選んだ彼女たちの想いを、もっと知りたいと思った。『マザリング』という本は書いたけれども、ずっと半身を置いてきたような、やり残した心残りがあった。それは彼女たちの言葉を聞くことだった、と。だからこそ、もう一度、「マザリング」の問い直しをしたいと思った。

そして第三に、これも大きい理由だが、世界の状況の変化だ。戦争はすでに始まり、気候変動による集中豪雨や酷暑など、地球環境は悪化の一途を辿っている。本書を書き始めたころは「気候変動」で済んだものが、すでに一線を越え、ドミノ倒しのような悪循環の連鎖、つまり「気候崩壊」が始まっているという見方もある。食糧難やエネルギー危機のリスクも高まる世界状況のなかで、少子化が広がっているのは、社会が成熟したからとか、経済的に厳しい家庭が多いからという理由だけでなく、思想的な、心情的なものが無意識

レベルで全世界的に広がっているからであろうことを、無視することはできない。

二〇二六年六月に公開された映画『急に具合が悪くなる』は、原作のがんに侵された哲学者と人類学者との往復書簡を、濱口竜介監督が大胆に脚色し、舞台演出家とユマニチュードという人間らしい認知症ケアの実践を目指す介護施設長のドラマとして、ほとんどをフランスで撮影した作品だ。主演の二人がカンヌ国際映画祭にて最優秀女優賞を受賞したことでも記憶に新しい。この映画では、がん患者である舞台演出家の真理が、少子高齢化は資本主義が招く必然だとレクチャーをしていた。資本はすべてを食い尽くす。自然、とりわけ人間の身体を労働力としてしか見ない。資本主義が拡大再生産を続けるためには、自然や人間の身体は、本来の姿を離れ、資本に従属するしかない。それが少子高齢化を招くのだ、と。

バーストライカーと呼ばれる、若い女性活動家も世界中に現れた。権力を持った人たちがこの世界を良くしようとしてくれないと子どもを産まない、という主張だ。あるいは反出生主義という思想が、世界的なブームになった。親との関係に悩んでいたり、自分の生命を呪ったりするような状態の人が、「こんな世界に子どもを産むこと自体が虐待だ」と言う。そこまで主張する人がいるのかという衝撃は大きかった。こうした時代の流れを、

見て見ぬふりをすることはできない。

積極的に子をもたないという選択をした人の話を聞いていこう。そこに時代が見えてくるかもしれない、と思った。

この本のタイトルは『ベイビージレンマ』とした。ベイビージレンマとは、直訳すれば、子どもをもつかどうか悩んでいる、子をもつことにジレンマを抱えている、という意味だ。後述するカナダのドキュメンタリー“The Climate Baby Dilemma”を観たことが大きいが、あの映画では子どもをもつかどうか悩む理由に気候変動のみを取り上げている。しかし、子をもたない理由は前述のとおりそれだけではない。戦争のリスク、国家への不安、資本主義や民主主義の行きづまり、女性の意識向上……、それらが時代的無意識となって、うずまいている。その葛藤と混沌を描きたい、「子をもつこと」の意味に変わるものと変わらないものがあるとしたら、それはどんな姿をしているのか、と思い、このタイトルにした。

未来は不確定だ。子はまさに不確定な未来そのものである。だからこそ、希望でもある。この存在を否定したら、私たちは未来というものを手放してしまう。子どもが未来を眼差(まなざ)す、その目を曇らせるものはどんなものでも防ぎたいと心から思う。子どもは可能性の宝

庫であり、社会の未来であり、これを読んでいるみなさん一人一人もそんな存在だったはずだから。けれども、みんなが悩んでいる。答えはない。ただみなさんと一緒に考えたい。子をもつこと／もたぬこと、その意味を。